

## はじめてのラテンアメリカ訪問

2005年2月

下川雅嗣

### <はじめに：WSF>

今年も卒論・ゼミ論要旨集のために原稿を海外渡航中に飛行機の中で書くことになった。渡航先は、生まれてはじめてのラテンアメリカ、ブラジルである。ブラジルのポルトアレグレ市で第5回目の世界社会フォーラム(以下WSF)が1月26日から1月31日にかけて開かれ、それに参加するためである。世界社会フォーラムとは、先進国の政治家、財界人、多国籍企業の代表、世界銀行やIMFの理事が集まるダボス会議(世界経済フォーラム)に対抗する民衆フォーラムとして2001年から毎年1月に10万人以上もの人々が全世界から集まり、



『もう一つの世界』を構想するための様々な試みを実践する場と言われている。"Another World is Possible"というスローガンの下に開かれており、第4回のみはインド・ムンバイで行われ、それ以外の4回はすべてポルトアレグレ市で行われている。今年も15万人くらいの方が全世界から集まったといわれている。それだけの大行事であり、人々の将来への希望を

語る場であるため、全世界の多くの国々ではその期間中、新聞の第一面の記事になっていたらしい。にもかかわらず、日本の新聞だけはほとんどこれを取り上げなかったと聞き、やはり日本社会の問題性を感じざるを得ない。しかしながら、私はここで、この世界社会フォーラムの報告をやろうと考えているわけではない。そもそも普通の日本人がこれに関心を持っていないことはゆゆしき問題だとは思いますが、このフォーラム自体が本当に社会を変える力を持っているかどうかについて断定できないし、そもそもフォーラムで行われたようなフォーマルな会議やセミナーや議論は、あまり私の性に合わないの(というか退屈なので)、実はほとんどきちんとは参加しなかった。そん



なことを書くと、今回の渡航費は大学から出ているのでどこかからお叱りを受けそうだが、ここに以下書くことを読んでいただくとそのお金を有効に使ったと思っていただけると期待する（余計、お叱りが大きくなるような気もするが...）。そこで、私がこの機会に WSF の周辺で、どんなグループと接し、何を見て、何をして、何を感じたかを分かち合いたい。さらに、その分かち合いが実は今年のゼミ論・卒論と関係している部分が多々あるので、それらの論文の紹介も兼ねることができるのではと思っている。ただ私の体験に絡まる論文だけしか紹介できないので、全部の論文を紹介できるわけではない。また紹介されるか否かと論文の評価は無関係であるので、その辺は了承願いたい。

### < No-vox >

WSF の始まる 2 日前に現地入りし、まず私は No-vox (声無きもの) という緩やかなネットワーク組織とともに動いた。この No-vox というネットワークは、フランスの野宿者運動団体(ex. DAL)、失業者運動団体(ex. AC!)、及び移住労働者運動団体がコーディネーターになり、ポルトガルやイタリアなど EU 圏での貧困者運動団体、そしてインドのダリット運動団体、日本の野宿者運動団体などが緩やかにつながり、国際的な『持たざる者』連帯のネットワークを構築しようというもので、数年前から様々な場で国際連帯行動に取り組んでいる。今回、No-vox は、現地の野宿者当事者運動団体 (MNL M : Movimento Nacional De Luta Pela Moradia : 居住のために闘う全



国運動)と共に、WSF の始まる前の 1 月 25、26 日にポルトアレグレで、『持たざる者のフォーラム』を開催し、その後 W S F の開催期間において、そこに集まった全世界の人々に『持たざる者』の存在をアピールする实际的行動という形で W S F に関った。No-vox は、WSF に対して、片足を中心に片足を外に置くという形で関わってきている。No-vox は、「WSF は持たざる者の運動としては好ましい場ではない。なぜならばわれわれが模索しているような持たざる者のネットワークを提供してくれない。WSF に貧困者の居場所がほとんど存在していないからだ。一口で言うと W S F は中流階級のフォーラムだ。しかし、それでは、つまり持たざる者が存在しない運動だったら、WSF がスローガンにしているもう一つの世界 (Another World) は不可能である。よってわれわれは、この W S F の機会を利用して持たざる者のネットワークや運動を実際に作っていく場所にしたい。」と考えているのである。

## <MNLM>

さて、上述した集まった全世界の人々に『持たざる者』の存在をアピールする実際の行動であるが、具体的には、MNLM市がポルトアレグレのホームレスのために1月25日未明にポルトアレグレ市の中心街にある旧政府社会保障省機関の空ビルを占拠することで始まった。これはもちろんWSFにポルトアレグレ市のホームレスの存在を示す、と同時に彼らの住む場所を実際に確保するためでもあった。



占拠突入は約100人くらいで行い、実際に住むのは50世帯くらいだと言う。実は私は

予定が早まったため突入には間に合わず、私が到着した25日昼は、すでに突入後で、そのときには、まだ警官隊が多数バリケードを張っていて、それ以上の野宿者及び外国人(No-vox支援者)が中に入らないようにしていた。この実力行使は、日本人の感覚からするとかなり過激に思えるが、農村における土地無し農民運動(MST: Movimiento sin Tierra)<sup>1</sup>の都市版で、当地では日常茶飯でそれほどでもない。ここでMNLMの紹介を少ししておく、この運動は主に都市の空ビルまたは空き地を占拠してそこを自分たちの住宅にする活動をやっている。これは、このような空ビルが多数存在するからできる運動(ポルトアレグレ市だけで1000くらいの空ビルがある)で、各都市に拠点を持つ全国当事者組織である。現在までに約30万世帯が参加し居住を勝ち取っている。用意周到に計画をし、ブラジル全体では2週間に1ビルくらいの割合で占拠を行っていると言う。また彼らはただ居住を確保するというだけではなく、都市での生活全体を守り、共同体を育てることも同時に狙っている。彼らの挙げている5つの主要課題は次の通りである。



ビル占拠。ただし占拠するだけでなく全体のプロセスを大切に。つまり組織化の準備、占拠後のコミュニティーづくり等。  
占拠後の抵抗。これによって永続的な住居にできる。

ビル占拠。ただし占拠するだけでなく全体のプロセスを大切に。つまり組織化の準備、占拠後のコミュニティーづくり等。

占拠後の抵抗。これによって永続的な住居にできる。

<sup>1</sup> 田辺さんのゼミ論参照。

都市の土地所有をより公平にするための規制化の実現

新技術の開発（環境と調和する都市での生活方法、Housingの新しい技術の開発）。

協同組合の強化。たとえば信用協同組合を作り、共同でお金を管理する。社会的経済のモデル（Social Economical Model）を作っていきたい。

なお、MNL Mは、2002年にポルトアレグレで行われたWSFの際にも空きビルを占拠することによって持たざる者の存在をアピールし、その後現在に至るまで、そのビルに68世帯が住み続けている。さて、今回のその後の経過は、25日午後3時から再度の交鈔（国連役人、ポルトアレグレ市長とMNL Mの交渉）が行われ、その結果、WSFの終わる2月1日までは占拠していても良い、その間水道を供給するとの約束を得る。一部にその約束で引き下がることに異論もあったが、とりあえずこれで妥協し、WSFの期間中にこの件を既成事実化・社会化することによってこのビルを確保することにした。その後外国人も中に入れるようになり、私も翌日は中に入り、また一緒に行った日本からの活動家もWSFの期間中そこに宿泊（タダ！）した。なお、思惑どおりこれは地元の新聞の一面に写真入りで載る。占拠した人々は早速地下に炊事場をつくり、2日目から共同炊事を行いながら共同体づくりに着手した。参加者一人ひとりが主体的にこの運動に関わっていることに感銘を受けた。

#### <WSF デモに対する貧困者の存在アピールとデモ>

WSFは、26日の夕方から行われる約15万人が参加する大規模デモ（というより、お祭りウォークのようなもの）で開始した。No-vox及びMNL Mは、ただデモに参加するよりは、ちょうど占拠ビルの前をWSFデモが通るので、デモ隊が通る間はビルの窓及びその前の道路より一段高いところで『持たざる者』のプレゼンスを示し続ける方が効果的であると判断し、デモには最後尾につくことにする。デモは大規模で、デモ隊がその前を



を通り続けるだけで3時間ほどかかり、その後私たちもデモに加わって約2時間は歩いた。その間の主なシュプレッヒコールは Ocupar, Resistir, Para morar（占拠、抵抗、居住のため）、土地改革を実施しろ、闘いを通して平和は勝ち取れる、の3種類だった。当初の判断は正しく、非常に目立つところで、多くのデモ隊が注目し、大いなる歓声、拍手を浴びた。しかも私自身はデモの全景を見ることができ

た。またかなりメディアもやってきて、私も2回ほどテレビのインタビュー（ブラジルとフランスのTV）に答えた。なお、占拠ビルの中の家族には子供もかなりいて、小さな子供たちがシュプレッヒコールを一生懸命あげている姿は印象的だった（写真5参照）。喉

が潰れても、子供たちがシュプレヒコールをあげだすとやめるわけにはいかなかった。家族ぐるみのシュプレヒコールには非常にエネルギーがあり、まさに一生がかかっている叫びだった。その後最後尾(実際は後ろから5つ目)についてデモも行ったが、これも何でもありのデモで非常に楽しかった。デモをすることによって貧困者が一体感を覚え、また本当に元気になっていくことを実感した。日本のデモではそれを体感することは難しそうに思い、その違いが際立っていた。



(占拠ビルのその後:WSF最終日の1月31日にポルトアレグレ市の住宅局に No-voxとして交渉に行く。その際に、この占拠には国際ネットワークが支援しているので、排除したら大変なことになるとプレッシャーをかける。しかし、2月14日にポルトアレグレ市は、占拠ビルからの追出しを実行しようとした。これに対して、帰国したNo-voxの仲間たちが、フランス、ポルトガルのブラジ

ル大使館へのデモを予告し、各国からの抗議文を送ることによって、行政の排除を現在のところ阻止している。)

### <MST 設立 25 周年記念>

さて、もう一つどうしても書きたいことがある。ちょうどWSF開催中の日曜日(30日)にポルトアレグレから約130Km離れた農村で、MST(土地無し農民運動)設立25



周年記念集会があるので、WSFを抜け出して参加しないかと誘われ、それに参加してきたことだ。その場所は、25年前に始めて占拠した農場だそうだ。MSTの概略をするとMSTは土地を持たない貧しい農民たちが、使用されていない土地を占拠し、そこにとどまり続けることによって土地を求める権利を追及していく運動である<sup>2</sup>。MSTの行動はまず野営から始まる。数十家族まとまって、自分たちの土地を手

に入れるまで、占拠予定地の近くにテントを張って座り込む。そうして来るべき占拠の日

<sup>2</sup> 詳細は田辺さんのゼミ論参照。

までの間、共にテント村を組むメンバー間で教育活動を行う。そこでは、自分たちの置かれている状況を自ら認識すること、社会への批判意識をもつこと、運動の意義を理解することを目指す。そして時期が来たら、空き農地の占拠を行う。こうして現在、約 40 万世帯が土地を手に入れ、10 万世帯が野営状態で待機しているという（総計 250 万人）。土地を手に入れた後も MST の活動は続く。住民グループを組織し、農産物をどう生産していくかその中で相談して決める。協同組合を作り皆で生産活動を行っていくのである。また、インフラ整備、教育、公衆衛生などについてもこのグループで協働して取り組んでいく。運動によって手に入れた土地では有機農業を行い、農薬や化学肥料は一切使用しない。それは一人一人が自然環境に対する責任を自覚しているからだ。これらのプロセスにおいては、一貫として、「学びは理論ではなく生活実践の中から自然に生まれるべき」「まず自分たちの置かれた状況を理解することから歩みは始める」とするパウロ・フレイレの教育学・意識化教育がベースになっており、参加者一人ひとりが主体的に資本主義ではなく平等で社会主義的な社会の建設（building the egalitarian and socialist society）を目的として意識しているのが感じられる。もともとルラ・ブラジル大統領はこの MST 運動を応援していたし、MST は彼の支持基盤の一つである。しかしながら、ルラ政権になってからも実質上の農地改革はまだなされていないし、それどころか現政権になってこの 2 年のうちに農地獲得闘争の中で 68 人が殺されている。

さて、設立 25 周年記念集会であるが、数千人もの人々が集まってきていた。過去に占拠した農場の中の道を、列をなして延々と歩き会場へ向かう。集会の始まりは演奏される音楽にあわせて海の中での踊りで告げられる。その後、



広場に設営された会場でそれぞれのスピーチが行われた。まず MST の事務局、その後、ブラジルの中で農地改革に積極的な近隣の州の知事の演説（内容は、民営化と遺伝子組換え種子への反対の表明）、MST のリーダーの演説、ベネズエラの農業大臣、ブラジルの

農地改革大臣、ベネズエラのチャベス大統領の演説と続く。その中で特に印象的だったのは 2 つあって、まず MST のリーダーの話が素晴らしかった。さすがにこの大きな運動の精神的支柱だけある。その要点を箇条書きにすると次のようなものだった。

- ・もともとここは何も生み出さない、蚊だけを生み出す土地だった。それが今や有機穀物を生み出している（MST は、むやみやたらに土地を占拠する運動ではなく、長い間ただ

大地主に所有だけされて、全く使われていない土地のみを占拠する。この原則はMNL Mも同じである)。

- ・現代の農業は2種類ある。ひとつはアグリビジネスに管理された農業 (control agriculture) で、もうひとつは小規模循環型農業である。管理された農業では、企業がすべてをコントロールし全世界で同じものが作られ、消費される。なぜ全世界で



同じものを食べる必要があるのか。もともとその地域にあったものが作られ、その人々の口になじんだものが食べられるのが自然だし、人間らしいのではないか。我々は後者の農業を目指す<sup>3</sup> (実際彼らは、自給自足のための農作物をつくり、その余力で出荷用の米を作るのを原則としている)。

- ・チャベス大統領に対して：あなたは農地改革を行った。それはすばらしい。ブラジルではまだ行われていない(とブラジルの農地改革大臣を見る)。ベネズエラでまず農地改革が行われ、次にブラジル、そしてラテンアメリカ全体の農地改革が可能になるだろう。ベネズエラに関して言えば、農地改革の後、教育改革が必要ではないか。ただアメリカ流の教育は意味がない。貧しい人が力を持つための教育、平等で社会主義的な社会を作るための教育が必要だ。そのための改革である。また管理型農業ではなく循環型農業を教えるための教育、シモン・ボリバルの歴史、さらにラテンアメリカがこのような状況におかれていることが意識できるような教育が必要だ。我々が置かれている状況を意識することは貧困者にとっての強力な武器である (consciousness of our situation is the strong weapon) からだ<sup>4</sup>。

### <ピケテロス>

もう一つの印象的だったことは、ベネズエラのチャベス大統領の話の途中にアルゼンチンのピケテロス (Barrios de Pie) の一団が大きなフラッグとともに大歓声の中で入場してきたことである。アルゼンチンのピケテロスという運動は、2002年アルゼンチン経済危機以来盛んになってきている新たな民衆運動であ



<sup>3</sup> 吉田真子さんの卒論に非常に通じるものがある。吉田卒論で綿密に調べられたことを農民達がきちんと意識化して反対していることに驚きを感じる。一部田中さんのゼミ論にも関係する議論。

<sup>4</sup> 糟谷さんの卒論で論じようとした方向性の行き着く先がこのMSTリーダーの教育に関するメッセージにあるように思う。

る。今の新自由主義的グローバリゼーションが進行した時代においては、以前のように労働組合がストをやって資本家や政府と闘っても単に、その会社が倒産するだけで、なんら労働者や貧困者にとって利益にならない。その代替として、道路を封鎖することによって、



政府やら多国籍企業等の資本家に圧力をかけるという運動である。つまり、道路封鎖で貧困者は困らない、困るのは外資系企業及び国内富裕層のみであるということらしい。私の師匠であるアンソレーナ師は、今の新自由主義的グロ



ーバリゼーションの問題にきちんと対峙して、それを変える可能性を持つ大きな力のある運動は3つあると紹介してくれたが、その2つがこのブラジルのMSTとアルゼンチンのピケテロス運動であり<sup>5</sup>、この2つの運動が、WSF開催期間中にその裏でお互いを

意識して出会っているのである。さらには、昨今の新自由主義的グローバリゼーションの中で、特に貧困層の視点にたち、それを意識した上で実際的な農地改革をやろうとしているベネズエラのチャベス大統領や農地改革に積極的なブラジルの州知事、さらに、ボリビアのコチャバンバで水の民営化の阻止を闘った人々<sup>6</sup>やらも集合しており、しかもそれぞれの運動が主体的にかつ、しっかり新自由主義的グローバリゼーションとアメリカの帝国主義を見据えた意識化がなされていることに感動を覚え涙した。またシモン・ボリバルのラテンアメリカ解放の思想は、まだ脈々と人々の中に生きていると感じた。

#### <ラテンアメリカの People's Process >

私はこれまでアジアの貧困者自身の運動に関心を強く持ち、ラテンアメリカはあまり知らなかった。そしてアジアの貧困層においては、日本人を含め先進国の人々はあまり知らないが、共同体を基盤として、創造的で主体的な People's Process (人々自身の歩み) が大きく発展していることを授業やゼミを通して学生に伝えて来た。また、その可能性を見ようとして見ないからその現実が見えないのだと教えてきたつもりである。それに対して、

<sup>5</sup> もう一つは、メキシコの先住民運動 (サパティスタ) である。

<sup>6</sup> これについては、黒川さんの卒論参照。なお、この集会参加者の話だと、コチャバンバの農民もこの闘いを機に、新自由主義的グローバリゼーションの問題がきちんと意識化され、先の新自由主義的グローバリゼーションの問題にきちんと対峙して、それを変える可能性大きな力のある運動の4つ目にこの農民たちも入るのではないかと言われていた。



ラテンアメリカは行ったことがなかったので、ラテンアメリカを研究している学生や研究者が、ラテンアメリカでは、共同体を基盤としたような創造的で主体的な People's Process は難しいと言われてそれをかなり鵜呑みにしていたところがある。今回初めて行って感じたことは、アジアの People's Process とは特徴は異なるが、ラテンアメリカにも共同体を基盤とし、創造的で主体的な People's Process (人々自身の歩み) は立派に存在しているじゃないか(!)ということである。またそれが日本にはほとんど伝わってきていないとも思った。このような運動参加者一人ひとりが意識化され、主体的に関っているラテンアメリカの運動を追うことは、もしかしたらアジアの運動よりも面白いかもしれないとさえ思う。ゼミの中で、黒川論文では、その底流に「新自由主義的グローバリゼーションの進行に伴う水の民営化の問題点とそれに対する対抗手段がほとんどない状態というやり場の無い思い」が感じられるし、また島田論文においても、アメリカの介入に対して如何ともし難い様子が感じられたが、どうしてどうして、ラテンアメリカの民衆は社会を変える力を未だに持っているという希望を感じた。

なお、私にとってははじめてのラテンアメリカだったし、あまりラテンアメリカには詳しくないので、以上述べたことは基本的なところを間違っている可能性もある。もしイスパニア語学科の学生やポルトガル語学科の学生で、私の間違いを教えてくれる人がいれば幸いである。また、実は私は、アジアよりもこのようなラテンアメリカの運動の方に興味が強いのではないかと心配している。しかし、スペイン語もポルトガル語もできない私にとって、今回もかなりしんどかったのだが、これは致命的である。将来的にこのようなことに興味を持つ人が出てくれて、通訳・翻訳をしてくれるような人がいれば幸いと思うしだいである。というか現地で何度ゼミ生の皆さんの顔を思い浮かべたことか...